

5. 真壁の平四郎のこと

問 「遠上徑山分風月帰開円福大道場法身透得無一物元是真壁平四郎」という掛軸を持っていますが、真壁平四郎とはどういう人ですか。⁽¹⁾

答 真壁の平四郎とは、松島瑞巖寺の法統の始まりとされる臨済宗円福寺の開山、法心〔ほっしん〕⁽²⁾のことで、平四郎はその俗名です。常陸国真壁郡猫島村の生れで、幼い時に父母を失い、真壁の領主左衛門尉常明の下僕となって、忠実に奉公していました。或る雪の日、主人の外出の供をして待つ間、下駄を懐に入れて温めていたのを誤解した常明は、激怒してその下駄で、平四郎を殴りつけました。額に傷を受けた平四郎は、無念の心をおさえ、その下駄を懐中にその場を立去りました。ここに一念発起した平四郎は、鎌倉に上り鎌倉五山第一となった寿福寺に寺男として住込み、一心不乱に刻苦励精して僧となることができました。⁽³⁾⁽⁴⁾その後10年の修業をつんだ平四郎は、大悟徹底を求めて、北九州を経て宋に渡りました。

禅宗が日本に根を下ろしたのは、鎌倉初期のことです。以心伝心の簡単にして峻烈な修行形式と、不立文字の哲学的思弁は、特に上流武士たちの歓迎するところとなったためです。日本仏教の母国ともいべき中国では、禅宗は南北朝時代に達磨によって伝えられ、唐代を経て宋代にはきわめて盛んになり、天子自らが禅僧の法脈を受けるものがあり、また多くの名僧が輩出しました。禅寺の代表格のものに五山と称せられるものがあり、その一つ徑山寺〔きんざんじ〕の無準師範は、禅宗第一の名僧とされ、⁽⁵⁾国の内外からすぐれた禅僧がここに集まり、修行に励んでいました。平四郎もこの徑山寺に入門しました。その時、無準師範は「円相に丁」を書いて示しました。これは平四郎に与えられた、悟りへの出題でした。⁽⁷⁾⁽⁸⁾仏にすがって悟りを求めるのではなく、師は弟子に大悟する機縁を与えるのみで、時に痛棒を加え叱咤するが、ひたすら自力で悟りを開く宗旨です。平四郎は性西または性才と称する一介の僧として、この出題と対決しながら、40才を越えた身で若手の俊才たちに伍して、坐禅に、労働に黙々ときびしい修業を続けていました。後に来日した中国僧普寧は、平四郎よりも先に徑山寺に来ており、また日本最高の禅僧と仰がれるようになった弁円が同寺に入ってきたのは、平四郎の修業中のことでした。⁽⁹⁾弁円は8才年長の性西を先輩として尊敬し、平四郎は日本一流の学者僧弁円を重んじ、共に精進の日々を送ったのでした。弁円は修業6年の後、仁治2年〔1241〕師範の許しを得て帰国しました。北条時頼に師と仰がれた祖元が、徑山寺に修行に来ていたのもこの頃でした。

円相に書かれた丁字を機縁として性西が大悟したのは、弁円の去った後で、既に50の坂に達しようとしていた時でした。後に鎌倉建長寺開山となり、松島円福寺で平四郎の後を継ぐことになった中国僧蘭溪道隆が、30才足らずで徑山寺に来ていたのも、この時期でした。蘭溪が徑山寺から天童山⁽¹⁰⁾

に移った年に、径山寺が焼けたので、性西は寺の復興のため、懸命の働きをしました。その時、日本の弁円からは、千枚の板が寺の復興の資にと送られてきました。

大悟した性西は、無準師範から法心の号を与えられました。それから更に2年間、師のもとに止まった後、足かけ11年を過ぎた径山寺を後にして、日本に帰国しました。既に国内では、径山寺に最も長い年月修行していた日本僧として、法心の名は知れわたっていました。法心は日本に着くと直ちに故郷の真壁に帰りました。彼が悟りを開くきっかけとなった旧主に対し、先ず感謝を捧げるためでした。その時代、宋で修業してきた帰朝僧は、最高に尊敬される存在で栄達は思いのままでしたのに、彼は情誼の道をとったのです。旧主の家では高貴の僧として彼を迎えたが、左衛門尉は既に出家して無道と号し、東北の方へ遍歴に出てしまったあとでした。新領主が、法心を招いて帰依したので、ここで数ヶ月を過ぎたが、法心は旧主無道の後を追って旅立ちました。

無道の行方を求めながら、法心は、しばらく松島の延福寺に足をとどめました。延福寺は松島寺とも呼ばれ、平安前期慈覚大師勸請開山〔かんじょうかいざん〕の天台宗の寺院でした。

この頃、鎌倉の執権北条時頼は、⁽¹¹⁾建長寺を建立して、宋から蘭溪道隆を迎えて開山としました。また、京都東福寺の開山となり、わが国第一の禅僧と称せられた弁円を、鎌倉に迎えて禅戒を受けました。⁽¹³⁾この蘭溪と弁円とは、径山寺の同門同志だったので、当然法心の存在が問題となり、時頼もまた、法心を重く遇するため、真壁の領主を通して、松島の支配者で岩切に本拠をもつ伊沢氏（留守氏）に命ずるところがあったものようです。法心は松島の岩窟〔法身窟と呼び現存する〕⁽¹⁴⁾で捜し出され、延福寺を円福寺と改め、天台宗から臨済宗に改宗してその開山とされました。諸国行脚で松島に来た時頼が法身窟で法心と会い、その高德に接し、鎌倉に帰って1千の軍勢をさし向け、墮落しきっていた天台宗延福寺を討伐して、禅寺とし法心を住職とした伝説があるのはこの時のことです。これは、後世作られた時頼回国記の伝えた虚説のようです。

法心が臨済宗円福寺開山となってから数年後、67才の時、旧主無道が北の七戸にいるというたよりを聞き、法心は後事を鎌倉の蘭溪道隆に託します。これに答えた蘭溪は、時頼にすすめて宋から普寧を招き、師の礼をもって建長寺に普寧をすえ、自らは法心の後を継いで松島円福寺の住職として来任しました。普寧は、径山寺の同門法心・弁円・蘭溪の先輩に当る名僧でした。

法心は、従う弟子3人とともに、七戸に急行しました。七戸の牧の西方の岩窟に病んでいた無道の前で、法心は昔の従者平四郎にかえり、大悟の機縁を与えてくれた旧主をいたわり、感謝の奉仕を続けることになりました。やがて、高德を慕って弟子達も集まり、小庵も五つほどでき、水田も開かれました。今、寺田と呼ばれているのがそれで、「法心袈裟掛けの松」と伝えられるものも残っています。やがて地方の豪族洞内氏の帰依をうけるようになり、寺が建立され、松島と同じく円福寺と名づけました。旧主無道は、法心に手厚く見守られながら、この地で世を去りました。法心がこの地で歿したのは、文永11年〔1274〕1月20日、81才でした。七戸円福寺は、後に池福山法蓮寺と改名され、今は曹洞宗の寺となっています。この寺には、額に傷のある法心の木像と、旧

主無道の僧形の像とが伝わっています。

- 注(1) 「遠く徑山に上り風月を分つ。帰りて開く円福大道場〔松島円福寺〕。法身透得して一物なし。元は是真壁の平四郎。」この詩は、法心自作といわれるが、実は円福寺6世の靈巖和尚の作である。法心の名を法身と書いたのが多いが、同音であるのでこの詩にあるように、法心と法身とを混同したものである。
- 注(2) 伊達政宗が、円福寺の荒廃を嘆き、その復興を志し、慶長10年〔1605〕起工、満4年を経て竣功し、瑞巖円福寺とした。伊達氏にゆかりの深い羽州瑞巖寺の名を、円福の寺名に重ねたものといわれる。大工棟梁梅村彦左右衛門に命じ、紀州の刑部左衛門国次をはじめ天下の名匠130人を集め、良材を紀州熊野山から採った。桃山式の様式で、その障壁画は豪華絢爛狩野派の粋を尽すなど、豪壮豊麗な建築で、本堂・庫裡及廊下は国宝、御成門・中門は重要文化財に指定されている。
- 注(3) 鎌倉にある臨済宗の5大寺。建長寺・円覚寺・寿福寺・浄明寺・浄智寺。
- 注(4) 鎌倉扇ヶ谷〔おおぎがやつ〕にあり、鎌倉五山の最古の寺、山号は亀谷山。正治2年〔1200〕源頼朝の妻平政子の発願。臨済の最初の布教者栄西の開山。
- 注(5) だるま。禅宗の始祖。詳しくは菩提達磨。南インド香至国の第3王子。始め般若多羅に学んで大いに大乘禅を唱え、中国に渡って梁の武帝に謁して問答し尊崇を受けたが、去って嵩山少林寺で9年間面壁坐禅。魏の明帝の正光2年〔521〕左腕を切って誠意を示した慧可に禅の奥儀を伝えた。魏の永安元年〔528〕入寂。後に唐の太宗が円覚大師と諡した。達磨大師ともいう。
- 注(6) 天台山・杭州靈隠寺・浄慈寺・天童山・鎮江徑山寺。
- 注(7) 完全円満の相で、悟りの表象としてあらわす円い形象。
- 注(8) 2及び2で整除される数、偶数。夏の草木が力強く茂るさまの象形で、最も古くは▽と書かれ、草木の種子のことで、よくみのって割れた形をあらわす。
- 注(9) 労働も悟りへの一つの道であり、禅僧は1日働かねば1日食わぬのが常であった。
- 注(10) 宋の名僧、法心とは徑山寺の同門。寛元4年〔1246〕来日、北条時頼の帰依を受け、建長5年〔1253〕鎌倉五山の一、建長寺の開山となった。法心が七戸に赴く時、後事を託されて松島円福寺に2年程住職として在住した。京都建仁寺に移ったこともあるが、のち鎌倉に帰り、弘安元年〔1278〕寂。我国最初の禅師号、大覚禅師と諡。著「語録」3巻。
- 注(11) 平安前期の僧、円仁。天台座主〔延暦寺の長〕。下野国の人。延暦13年〔794〕生。承和5年〔838〕入唐、五台山を巡拝、同14年帰朝。顕密2教の著作多く、また「入唐求法巡礼行記」4巻などがある。貞観6年〔864〕寂、71才。
- 注(12) 僧が寺を建立して、自ら開山となることは僭越であるとして、自分の師僧を開山に仰ぎ、自分は2代以下に坐ること。松島延福寺は寂定坊円心の開基であるが、師の慈覚大師を勧請開山とし、円心は第2代住職となった。天台宗延福寺については記録・文献に乏しく、

創建の時期についても曖昧である。「封内風土記」巻之4（田辺希文）には『伝云淳和帝
 天長五年〔828〕。慈覚大師之創建。而号青龍山延福寺』とある。これは「松島天台記」
 〔弘長3〔1263〕成立、「仙台叢書」第2巻の内〕の『天長戊申五年慈覚大師建立也』
 に拠ったもので、「奥羽観蹟聞老志」（佐久間洞巖）・「松島町誌」第2版等にもこれを採
 っている。これに対し「宮城県仏教史」（佐々久）等は『慈覚の勧請開山で……元慶3年
 〔879〕の開基と伝えられる。』とあるが、慈覚大師はこれより15年前の貞観6年〔864〕
 に既に入寂しているので疑義がある。慈覚大師の法孫が関東・東北に多かったので、慈覚
 大師を勧請開山としたものが多い。山寺の立石寺・松島延福寺・霊山・北上黒石寺・中尊
 寺等がその例である。

- 注(13) 京都市東山区本町にある臨済宗東福寺派の大本山。嘉禎2年〔1236〕藤原道家が創建、
 弁円を開山とした。京都五山の一。鎌倉・室町時代の古建築で有名。
- 注(14) 姓は藤原、はじめ伊沢氏を称した。源頼朝の平泉征伐後、文治6年〔1190〕奥州留守職と
 して多賀国府に着任した伊沢左近将監家景の後裔である。のちに、留守氏は天正18年小田
 原に参陣しなかったため領地を没収され、政宗の家臣となり、一門に列した。
- 注(15) 鎌倉幕府の執権北条時頼は、出家して道崇、最明寺入道といい、密かに諸国を遍歴して、
 治政・民情を視察したと伝えられる。「鉢の木」の伝説など有名である。

資料 宮城県仏教史（佐々久、単行書及び「宮城県史」第12巻の内）
 松島巡覧記（相原友直、「仙台叢書」第2巻の内）
 松島天台記（「仙台叢書」第2巻の内）
 松島拾翠
 元亨釈書（虎関師錬、「国史大系」第31巻の内）

6. 江戸時代の郷土的な俳書

問 貴館所蔵の江戸時代の郷土俳人の俳書（書名、著者名）をお知らせください。

- 答 松窓乙二 乙二七部集 上・下 天保8〔1837〕序 江戸萬笈堂刊
 (1) " " をのゝえ草稿（題簽書名：松窓句集） 文政6〔1823〕序
 " " 乙二自筆句帳 昭和42 白石公民館刊〔原本：文化12〔1829〕刊〕
 乙二句集（「仙台叢書」2 大正12）
- 大場雄淵 伊具の巻 かくし田の里 上 文化頃〔1801～1818〕刊
 (2)